

刊本『笈の小文』の諸問題（上）

——「須磨紀行」をめぐって——

井 上 敏 幸

はじめに

一般に笈の小文の旅は、貞享四年十月二十五日江戸を出立してより、貞享五年四月二十三日京都に入る迄の間だとされているが、芭蕉における旅の意識は、京都に入ること、で終焉していたわけではなく、京都以降、大津・岐阜・名古屋・熱田、さらに八月十五日の更科姥捨の月見と続き、八月下旬の江戸帰着まで連続していたと考えるのが正しいようである。もっと大袈裟な言い方をすれば、八月下旬江戸帰着以後も、芭蕉は漂泊を思い続け、旅することを希求していたといって過言ではない。その間の事情は、「とし明けても猶旅の心ちやまず」という書簡の文面（元禄二年閏正月筆か、猿雖（推定）宛芭蕉書簡）に明らかである。その言葉通り、芭蕉は、元禄二年三月二十七日、第二次芭蕉庵

を他人に売払って旅に出ることになるが、この旅立ちが、これまで数度の旅立ちとは、自ら意味の違ったものだったことは容易に推測されるわけであるが、いまそのことには触れないことにする。そして、この陸奥への旅は、八月下旬大垣に入って終り、九月六日、ふたたび伊勢へ向うことで、作品『おくのほそ道』は結ばれており、実は、陸奥の旅も、終りなき旅であったことが知られる。したがって、その後の二年間も、芭蕉にとっては、漂泊の旅が続くことになったのである。

以上のような連続した芭蕉の旅を考えてみれば、刊本『笈の小文』が示す、いわゆる笈の小文の旅は、連続する芭蕉の旅の一部分を抜き出したものにすぎなかったという考え方も成り立つであろう。

ところで、刊本『笈の小文』の示す芭蕉の旅が、大きく三部にわけられることについては、すでに宮本三郎氏の指

摘がある（「『笈の小文』への疑問上」『文学』昭和四五年四月）。

氏は、（一）江戸出発より帰郷まで、（二）大和を中心として、（三）須磨・明石巡遊の三部にわけられており、私も、同意見で、（一）（二）については、すでに論じたことがあり、ここでは省略することに^{註1}する。したがって問題は、（三）須磨・明石巡遊の部ということになる。この部分が、別に「須磨紀行」とも呼ばれていることは、すでに周知の通りであるが、なぜそのように呼ばれたのか、あるいは、なぜそのように呼んでもよかったかについて詳述されたものを見いだせない。私は、この点にこの部分の最も重要な問題がひそんでいるように思う。

問題の「須磨紀行」という呼称は、芭蕉没後元禄十一年に刊行された、最初の芭蕉発句集『泊船集』（内題に「芭蕉菴拾遺稿 洛陽 風国撰次」とある）夏部郭公の項に、

須磨の蟹の矢さきに啼や郭公

此詞書ハ須磨紀行に見え侍る。是ハ須磨の蟹の鳶鳥を追とて、矢を放ちけるに、源平のむかしもおもはれて、吟じたまふなりけり。（巻之三・二・オ）

といった形で見える。^{註2}つまり風国は、「須磨の蟹」の句には詞書があり、それは「須磨紀行」と呼ばれるものに書かれているもので、その内容は、「須磨の蟹の鳶鳥……なりけり」といったものと、概略を説明していたわけである。さらに『泊船集』夏部には、刊本『笈の小文』と重複

する発句四、

かたつぶり角ふり分よすま明石（巻之三・十六・オ）

あかしの夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月（同前）

あかし

郭公聞（消が正しい）行かたや嶋一ツ（巻之三・十六・ウ）

すま

月を見ても物たらずや須磨の夏（同前）

が収められており、最後に掲げられた「月を見ても」の後に、いま一つ注目すべき書き付けがある。

すまあかしの句、如此ならべて申されしにハあらず。

今集めならべしものなりけり。

この説明文は曖昧であって、様々な解釈が可能である。自分が見た「須磨紀行」に、これらの四句がこのようにならんでいたのではないが、今仮にならべてみたという意味に、また、これら四句は、「須磨紀行」ではなく、他の俳書から集めてこのようにならべたの意に、さらに、四句の中のあるものだけを他書より集めたの意味にも解されよう。残念というより他はないが、風国はそこらあたりのことを正確に書き残していなかった。したがって、我々は『泊船集』によって、ストレートに風国が見た「須磨紀行」を想定することはできないわけである。

しかし、我々は、元禄十一年以前に、風国が見た「須磨

紀行」と呼ばれるにふさわしい一個の作品が存在し、その内容が、少くとも現在の刊本『笈の小文』と重複するものだったことだけは諒解できるのであり、こういった意味において、刊本『笈の小文』の須磨・明石の部分は、今一度検討されねばならないことになるのである。この問題は、きわめて魅力的であって、さまざまな空想さえも湧いてくるのであるが、そうした空想は、最後のギリ／＼まで慎まねばならないであろう。

私は、それとは逆に、芭蕉・杜国の須磨・明石における事実としての旅の具体的な検討を通して、この問題にせまってみたい。

註1 拙稿「『笈の小文』の問題点一・二」「伊賀銭別」と大仏再興周辺」「語文研究」四四・五合併号昭和五三年六月、「刊本『笈の小文』への視座」「紀行」と「記」と「道の記」と」「『文学』昭和五三年八月、「幻想「大和後の行記」」「『文学』昭和五五年三月、参照。

2 九州大学文学部国文研究室蔵、「元禄十一戊寅年十一月吉日京寺町二条上ル町井筒屋庄兵衛板」による。

一

須磨・明石における芭蕉・杜国の足跡についての従来の研究にも、元禄前後の地誌類を参観した場合、さまざまな問題が残っていることに気づかされる。そうした問題点を

さぐるために、貞享五年四月二十五日付惣七（猿雖）宛杜国・芭蕉連名書簡を基に、実際の足取りを考えてみることにする。書簡に詳述されている尼崎↓明石↓京都間の地名を、まずは道順にそって検討していくことにする。

十九日

1 あまが崎出船（書簡の記載のままに掲げる。（）又は（）を付したものは、筆者が考えた項目である。）。

2 兵庫に夜泊。

同書簡に「道のはど百三十里、此内船十三里」とあるが、尼崎・兵庫間は七里（植田下省子著宝永七年刊『兵庫名所記』、『倭漢三才図会』等。ただし、元禄九年江間氏親序内閣文庫本『海上行囊抄』には、尼崎より、鳴尾↓西宮↓仰木↓御影↓脇浜↓神辺↓兵庫間を八里とする。）である。とするとあとの六里は、どこで乗ったかが問題となるが、この問題は、「この海見たらんこそ物にハかへられじと、あかしより須磨に帰りてとまる」という書簡の記述を検討する19において詳しく触れることにする。

二十日

3 経の嶋。

『兵庫名所記』上「築嶋の来由」の項に、「清盛公此浦上下往来の船、風波の難義なからんが為にとて、応保元年二月上旬より始めて嶋を築しめ給ふに、同八月二日

大風に波を動し潮さかのぼって元の青海となれり。重
て同三年三月下旬阿波民部成良奉行として築けるに、
又南風おこつて忽たちまち白浪をたゞき又嶋を詢ゆりうしなふた
り。既に成就なりがたし。故かるがゆへに、時の博士阿倍の泰
氏を召て問給ふに（中略）此嶋通例にしてなりがたし、
人柱を入れて築しめ給ひなバ成就すべきと也。是に依て
当国生田の小野に関をすへ、往来の旅人をからめ捕へ
しに、其歎限なし。爰に平相国の家童に松王兒童、い
まだ若年といへども諸人の歎を哀ミ、我一人此嶋に入
其命に替らんと誓、白鞍しろくらおき打乗のり海内にいりしとか
や。且て又数の石に一切経を書写し彫ほり付て海底に入
し。誠に龍神納受有けるにや。其後つゝがなく此嶋成
就して、往来の船の恐なく、国家の宝末代の規模と成
ける。依て経の嶋と名付たり云々」とある。これを当
時の俗伝とすれば、芭蕉書簡の「相国入道の心を尽さ
れたる」という叙述は、こうした俗伝を通して経の島
を見ていたことがわかる。たとえば鵜飼石斎のごと
く、「相公造意代天靈俗伝妄説人為柱」（「兵庫十
詠」『扶桑名勝詩集中』所載）と單純に俗伝をしりぞけ
る態度ではなく、むしろそれに従った態度であつたと
いふべきであらう。

4 わだの御崎。

『陸西遊行囊抄四』「兵庫ヨリ南ノ浜ハヅレナリ、兵

庫より三・四町」。『兵庫名所記』に「わだの御崎へ
五丁」とある。

5 わだの笠松。

延宝八年二月序刊『福原鬘鏡』に「輪田笠松 兵庫町
はづれより壺丁西に有之」とある。

イ（清盛石塔 古塚十三ノ内）

『陸西遊行囊抄四』に「笠松ヨリ一町計南」と記す。
『兵庫名所記』には「きよもりたうへ二丁」とする。

6 内裏屋敷。

『陸西遊行囊抄四』に「自兵庫南西ニアリ、自兵庫十
町計也」とある。

7 本間が遠矢を射て名をはこりたる跡。

『兵庫名所記』に「建武中、尊氏つくしより上洛のと
き、本間孫四郎重氏此和田の渚より將軍の御船へ遠矢
を射て名をあげし所也」、「和田崎わださき六三丁西に松原」
とある。宇都宮遯庵の『巖邑紀行』（明暦三年成立、宝
永元年刊）和田御崎三首の詞書の中に、「同伴の人は
を見て、本間が鵜うさぎを射し事ハ実事にあらず。太平記を
あらはす者の詞をかざりてかけり、信ずべからずとい
へれど、既に書にあらハして久しくいひ伝ふる事なれ
バ、たとひ異説ありとても、故事として詩文に作らん
に拠よりなしといふべからず。」といった記事があり、
芭蕉の発句「須磨のあまの矢先に鳴か郭公」を考える

場合に、参考となる点が多い。

ロ (通盛塚 古塚十三ノ内)。

『難波丸綱目六』(延享五年刊)に「兵庫の西柳原門口と云より十七八町程西にて海道南脇に池有。此堤の上に松三本これ有」とあり、『陸西遊行囊抄四』に「右同所(駒ヶ林ノ西海道ノ左池)堤ノ上ニ有之」とある。

ハ (越中前司盛俊塚 古塚十三ノ内)。

『陸西遊行囊抄四』に「自路右ノ方蓮池ノ水入口ナリ。西代村ヨリハ三町山ノ下ニアリ。猪俣小平六俊綱ト組テ討レシ所ナリ」とある。

⑧ 行平の松風・村雨の旧跡。(ニ 松風・村雨塚 古塚十三ノ内)

⑨ さつまの守の六弥太と勝負し玉ふ旧跡。(ホ 忠度塚 古塚十三ノ内)

書簡に記載された順序は、4→⑨のごとくであるが、その間に古塚イハもあった。地誌類と比較してみると、順序に乱れがあるようであるが、問題とするに及ばない。しかし、⑧と⑨とは明らかに逆でなければならぬ。「駒ヶ林一丁西」(兵庫名所記)にある⑨と⑧の間には、長田・西代・板宿村があり、芭蕉達は、⑧より目的地である須磨の地(厳密には西須磨村)に足を踏み入れていたからである。『兵庫名所記』「忠度

塚」の項に「さつまの守平のり一ノ谷落城の日、岡部六弥太忠澄に討れたまふ」とあり、また⑧について同書は、「月見の松兵庫より一里半、東須磨村ノ上、山の中段二松十本余あり、行平中納言月見の松旧跡也。」「行平配所の松、かい道より南浜へ東須磨ノ下」などと記し、さらに「此ほとりを松風・村雨の旧跡とも云。二人の海士の古跡ハ、是より一里山奥に多井の畑と申所ニ姉妹の石塔あり、則出生の地と云」と述べている。なお『福原鬢鏡』には、「月見の松」(山中に松十数本)「行平松」(海辺に大木の松一本)を描き、そのそばに「むらさめ堂」を描いている。そして、「行平松」三句の中には、貞享四年秋、芭蕉が『かしまの記』冒頭に引用した安原貞室の句「松にすめ月も三五夜中納言」がある。

10 西須磨。

当時の須磨は、東須磨・西須磨・浜須磨の三つに分かれていた。『福原鬢鏡』『陸西遊行囊抄』『兵庫名所記』ともにこの名称を用いている。『兵庫名所記』では須磨浦の項に「兵庫より一里半余。東・西・濱と今村々へだつ。此間にちもり川あり」と説明している。

11 関屋のあと。

『福原鬢鏡』『重衡腰掛松』の注記に「東須磨村はづれにあり」とあり、これより西が西須磨であることが

わかる。西須磨村の村落の上方に須磨寺、その上方に「うしろの山」があり、須磨関屋跡は更に西の方にある。同書同注記には「須磨寺馬場崎に在家有、此にしはずれ川ばた左右の高ミ」とその所在を説明しているが、『陸西遊行囊抄四』では「血盛と濱須磨トノ間、今ハ田ノ中ト云々。或ハ又須磨寺ノ馬場前ト云々。其所不分明。」としている。書簡の書き方に従えば、芭蕉・杜国は須磨寺を通りこしてしまっていることになる。これは大きな問題である。芭蕉には、書簡執筆の段階ですでに何らかの文章創作の意識がはたらいていたといわねばならないであろう。

12 一ノ谷。

『兵庫名所記』に「濱須磨より六丁西。此谷の長さ四丁余。横式拾間、高さ十二間。たに口より波打ぎわ迄九一丁余。二の谷に到る間二丁四十間斗」とある。

13 逆落し。

『陸西遊行囊抄四』に、「坂落・巖石落、一・二ノ谷ノ間、北ノ方ノ奥也」とある。

14 鐘懸松。

『難波丸綱目』に、「一谷の山岸に大松一本有」と記す。なお、同書挿絵に、一の谷の右方岩上、鉄拐峯下方に大松を描くが、この挿絵は、『福原鬘鏡』を流用したものだったことが明白である。

15 てつかひが峰。

『陸西遊行囊抄四』に、「自須磨乾ノ方半里。見渡シノ山上ナリ」とある。

16

すま・あかし左右にわかれ、あハち嶋・丹波山、かの海士が古里田井の畑村など、めの下に見おろして、天皇の皇居ハすまの上野と云る。

書簡は、この眺望の中で、平家没落の日の哀れさを、「其代のありさま心に移り」、「さすがにみるこゝちして」と記しているが、これは「天皇の皇居」、「すまの上野」を見ることで触発されたと考えられる。この皇居について『兵庫名所記』は、「安徳天皇御遷幸陣所、寿永三年平家一の谷籠城、此所に皇居なし奉る。内裏やしき陣屋、廿三間四方土手の跡。（中略）此所を須磨の上野と云」と述べている。なお、刊本『笈の小文』本文中の「上野とおぼしき所」と、同じく刊本本文中の「一ノ谷内裏やしき」との書分けには注意しなければならない。というのは、「上野とおぼしき所」は、『陸西遊行囊抄四』のいう「上野 是ハ須磨寺ノ辺ヲ云。自海道右ナリ。」だったからである。

17 敦盛の石塔。（へ 敦盛塚 古塚十三ノ内）。

石塔は「三の谷の間、住還の少上^{うわ}て」（兵庫名所記）にあり、道順としては、一・二の谷の西で、書簡の記述の順序は正しい。「敦盛の石塔にて泪をとゞめ兼

候」という、書簡における感動の頂点とも受けとれる記述が、刊本『笈の小文』では全て欠落している。同行の杜国書簡は明らかに敦盛に焦点を置いている。（貞享五年四月廿四日付惣七（猿雖）宛）また当時の紀行作品、特に漢詩においては、石川丈山の「藝陽道行詩」に対する林羅山・菅玄同の応酬（詞林意行集）・鵜飼石斎の「兵庫十詠」（扶桑名勝詩集）・宇都宮遜庵の『巖邑紀行』などに伺えるごとく、須磨には欠くことのできない詩題となっていたのである。刊本『笈の小文』は、なぜ敦盛石塔をはずしてしまったのか。敦盛をはずして成立する芭蕉の文章には、当時の一般的な紀行作品の発想とは、非常に異なる創作契機があったといわねばならないであろう。このことは後に詳述する。

18 すま寺。

11ですでに触れたごとく、須磨寺がここに出てくるのはおかしい。敦盛石塔を過ぎればただちに摂播両国の境「境川」であり、明石へはわずかに三里である。書簡の「あかしより須磨に帰りてとまる」の記述からすれば、どう考えてみても、芭蕉らは、敦盛石塔から陸路明石へ直行したはずで、須磨寺へ引き返したとは考えられない。書簡の文章には、芭蕉の須磨寺に対する感情が直接的に反映されていたと見る以外に方法はな

いように思う。「すま寺の淋しさ口をとぢたる斗二候。蟬折・こま笛、料足十足見る迄もなし」という記述が問題である。「口をとぢたる斗二候」とはどういうことだったかである。刊本『笈の小文』には、「須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ」という句があり、「口をとぢた」という記述は嘘だったということになりかねない。「料足十足見る迄もなし」という激しい嫌悪感からすれば、訪問の当座にこの句が成ったかどうかはなほだ疑わしいのである。『芭蕉翁真蹟拾遺』『泊船集』にもこの句はなく、元禄十一年十一月刊『続有磯海』に「丈艸所持」の短冊として紹介されている。

とすれば、あるいは丈草との出会い以降の作（元禄二年あるいは三年以降か。市橋鐸氏「増訂丈艸年譜」）だったかとも考えられてくる。ところで、須磨寺を、道順通りに訪ねていた筈の芭蕉が、その通りに書簡に書こうとしなかった理由は、須磨寺の俗化・観光化に対する減滅だったといって誤らないであろう。このことについて『兵庫名所記』は、「須磨寺靈宝ハ品々有之といへども畧す」といいながら、「▲青葉の笛弘法大師作 ▲高麗笛祐学僧正作歌二へふかね共音に聞へて笛竹のよゝのむかしを思ひこそやれ ▲敦盛赤旗の名号法然上人筆同へ音寿丸世にこりすまで絶入て弥陀の蓮にとともに生るゝ ▲母衣絹名号蓮生坊師筆同へ法の水

墨と硯でかきおくも心行く足あみだ仏か ▲敦盛幼年「童寿丸と云し」の時ノ手跡和歌二首 ▲同甲冑よろいあり」のごとく、六種

をあげている。芭蕉訪問当時すでに、こうした内容のパンフレット類があるいは売られていたのではなかったか。天理図書館所蔵の『社寺縁起集』の中に、『摂州須磨寺靈宝付』一枚刷、『摂州須磨寺略縁起』一枚刷などがある。後者は江戸中期頃の刊行と思われるが、前者はやや古いもののごとくである。これらの中に、青葉の笛についての歌「ふかね共」があり、やはり弘法大師作となっている。刊本『笈の小文』にある芭蕉句「須磨寺やふかね笛きく木下やみ」は、明らかにこの俗伝の歌をたち入れた句であり、俗化・観光化をいきどおる芭蕉の姿勢と、こうした俗伝に対する姿勢の違いとが伺えて面白い。しかし、「すま寺」の問題は、17敦盛石塔と同じく、刊本本文において全て削除されてしまったことにある筈である。

ト (人丸塚 古塚十三ノ内)。

『陸西遊行囊抄五』に「自兵庫到干此五里、柿本明神明石ノ駅ノ入口、北ノ山際ニ華表有。城辺ノ山上ニ社アリ」とあるごとく、明石の人磨遺跡は神社であって塚ではなかった点に問題が残る。たとえば益軒の『和州巡覧記』(元禄九年成)には、「柿本村 柿本の人丸の墓あり」、「人丸の墓 歌塚と云。又人丸の墓は奈

良より一里余、南櫟本と云所にも有」のごとく三ヶ所も示されており、笈の小文の旅における芭蕉の足取りからすれば、三ヶ所とも立寄ることは可能だったからである。トについては、あるいはこうした再考を必要とするのではあるまいか。とすれば、書簡の記述「この海見たらんこそ物にハかへられじと、あかしより須磨に帰りてとまる」も、見直されねばならない。明石訪問の目的は、元和頃に築かれた「柿本人麻呂社」(播州名所巡覧図絵)を訪ねることだったのではなく、文字通り、明石の海(名所明石浦)を見るためだったかという具合にである。

19 あかしより須磨。

18すでに引用した書簡の記述「この海見たらんこそ物にハかへられじと、あかしより須磨に帰りてとまる」における須磨への帰路が、陸路であったか海路であったか、資料的には、不明としかいようがない。通説は陸路のごとくであるが、岡田利兵衛氏は「海岸へ出て引返えしたとするのが妥当であろう」(『芭蕉の風土』白川書院昭和四一年刊)とされている。私も岡田説に賛同したい。兵庫より明石へ五里、実際には所々を見廻って七・八里も歩いていた筈で、その上同じ道を見廻すのはやや気分的にもいやだったであろう。それこそ書簡にいう通り、「この海見たらんこそ物に

ハかへらじ」という気持で、海路をとったと見るべきであろう。とすると、先に1・2において、尼崎↓兵庫間の船路七里を考え、書簡の里程「此内船十三里」の残り六里を問題として残していたわけであるが、明石よりの帰路を船路とすれば、明石↓鴉崎↓塩屋↓一ノ谷↓須磨間各々一里で計四里（海上行囊抄一）がここで消化されたことになる。不足はあと二里であるが、それは翌二十一日の朝、須磨↓兵庫間で使われたのではなかったかと推測する。このことは次項で検討するが、いま、明石↓須磨間を船と考えれば、芭蕉達は夕方近くに明石を出て、夜に入って須磨着ということになりそう、刊本『笈の小文』所載の「明石夜泊」の句が、全くの虚構ではなく、少くとも船路の体験をバックにしていたということが考えられてくるのである。

二十一日

(20) (須磨↓兵庫)。

『海上行囊抄一』に「須磨↓駒ケ林」一里に近し、「駒ケ林↓兵庫」一里とある。芭蕉達は、前夜に続き「この海見たらんこそ」と、今度は早朝の須磨浦の海を見るべく、この間約二里を船に乗ったのではあるまいか。ここに船路二里を置くことが、全行程の上から見て、最も自然であり、かつ意味もあり、計算も合っ

てくるからである。

チ (良将楠が塚 古塚十三ノ内)

『福原鬘鏡』に「楠河内判官正成塚付菩提所」として「印に梅松有。兵庫ヨリ五丁北、海道ヨリ壱町上手。同菩提所、右塚ヨリ貳町上手、坂本村ニ有云々」と注記する。なお、元禄四年に水戸光圀が石碑を建立して後の地誌類は、その石碑の図と碑文とを、決して大きく掲げるようになる。

リ (河原太郎兄弟 古塚十三ノ内)

『兵庫名所記上』に、「神戸村六三丁斗東、畠の中に塚印の松二本有。(中略)今ハ塚印斗也」とある。

ヌ (生田小野坂 坂七ツノ内)

3 経の島ですでに触れたごとく、生田の小野に関をすえて、旅人をからめたことが伝えられていると同時に、歌枕としても有名であり、芭蕉達はかなり意識していたらしい。『福原鬘鏡』は「生田川 生田海 生田森 生田池 小野坂 へ津の国の生田の川の水上は今こそ見つれ布引の瀧 藤原基隆」のごとくに記し、『陸西遊行囊抄三』には、「小野坂 生田川ノ東ノ岸ニアル坂ナリ。小野崎 小野ノ邑(崎の誤か)ハ坂ヨリ左方生田川ノ末ノ方ニアリ。古歌ニ生田ノ小野トヨメルハ此辺ナリ。追分 小野坂ノ辺ニアリ。自是赴右ハ布引ノ瀧ノ路也」とある。『兵庫名所記』にも「小

野坂・同崎」として、「生田川の東、小坂有。崎ハ川すそ也」と注記する。『陸西遊行囊抄』に従えば、芭蕉達は、この追分から布引の滝にのぼったことになる。

21 布引の瀧にのぼる。(布引 滝七ツノ内)

『兵庫名所記』に「生田川の水上なり。瀧二段にして流る。間二十三丈余、海辺よりミるもの、布をさらし地にはへたるがごとし」と説明がある。同書里程表に「兵庫より一里余」と記す。

ル (乙女塚 古塚十三ノ内)。

『兵庫名所記』に「乙女塚 おとめ塚ハ女のつか、うなひ乙女と云。もとめ塚ハ二人の男、小竹田男・千努男也。古塚三ツ有。一ツハ生田川東、味泥村にあり。一ツハ遠目村に有。一ツハ住吉川西、御田村二有。各十丁斗をへだつ」とある。なお前掲岡田氏『芭蕉の風土』によれば、「前方後円の巨大な古墳」で、塚の間は各々約二軒ほどあるとのことである。

(22) (西宮→昆陽)。

乙女塚以後、どのような路をたどったか不明であるが、いま仮りに「箕面滝」までの道を考えてみる。西宮までそのまま直行したと考えて、兵庫→西宮間、五里(倭漢三才図会・兵庫名所記等)。布引滝の往復約一里を加えて六里。須磨→兵庫間の船路二里を加えて八

里。この日は、さらに西宮を越して、昆陽あたりまで行ったかと思われる。『陸西遊行囊抄三』の西宮・今津村間の追分の条に「自是右(芭蕉の足どりでは左)ニ入バ山崎道、京路ノ順次ナリ」とある。都合十里、昆陽あたりに宿をとったかと思われる。

二十二日

ヲ (箕面滝 滝七ツノ内)。

昆陽を出発、山崎道を通ったとすれば、伊丹・瀬川を通り、箕面へ。

ワ (勝尾寺ノ山 山峰六ツノ内)。

元禄三年開版『西国順礼道知ルべ』に「箕面の滝より勝尾寺へ一里」とある。

23 山崎道。

勝尾寺より下り、再び山崎道へ出て、郡山、芥川を通り古曾部村へ(陸西遊行囊抄三)。

24 能因の塚。

元禄二年二月の旅を叙した、益軒の『続諸州めぐり』に、「古曾部村は、安満村より七八町南にあり。其間に別所村有。古曾部村は山下の村なり。村の中に能因が古墳、田のほとりに有。頗大なり。古木生たり。其前に石碑あり。永井日向守殿立らる。林道春の碑の銘有。碑陰の銘は、黒川道祐書之。(中略)能因此地に住せし故、古曾部の入道といふ」とある。

25 金龍寺。

同じく『続諸州めぐり』に「山崎より二里あり。(中略) 広く深き谷あり。谷口に安満村あり。(中略) 金龍寺も安満村の境内なり。安満より谷中を行くこと数町にして、右に小谷有。是金龍寺のある所の下也。山下より坂を上る事十三町、其間並木の山桜多し。(中略) 寺只一坊あり。入相の鐘とて有。能因法師が、入相の鐘に花ぞちりけるとよみし此所なり。景よし。(中略) 日暮れば、遊客をとめて宿せしむと云。金龍寺の上の山を邂逅山と云。名所也」とある。書簡に「能因の塚・金龍寺の入相の鐘を見る」とあるが、二十一日も日暮れに近づき、あるいは、益軒の記述のごとく、金龍寺の一坊に泊ることになったのではあるまいか。

二十三日

26 山崎宗鑑やしき。

金龍寺を出て、再び山崎道に戻り、桜井をへて山崎宝寺。『陸西遊行囊抄三』に、「宝積寺 右(芭蕉達の道順では左)ノ山上ニアリ。俗是ヲ宝寺ト云」とあるが、宗鑑屋舗の位置は、元禄頃作とされる『新修宝寺絵図』に「宗鑑やしき」と記入された位置がそれとされている(吉川一郎氏『山崎宗鑑伝』)。

芭蕉達は、宗鑑屋舗を辞し、上久世・上柱・下桂邑(陸西遊行囊抄三)を通り、京へ三里の道をたどったと

思われる。

二

刊本『笈の小文』須磨・明石の条は、

須磨

一月はあれど留主のやう也須磨の夏

二月見ても物たらはずや須磨の夏

(イ) 卯月中比の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月も……………

……………(中略)……………

……………漁人の軒ちかき芥子のたえぐに見渡さる。

三 海士の顔先見らるゝやけしの花

(ロ) 東須磨・西須磨・浜須磨と三所にわかれて、あながちに……………

……………(中略)……………

……………漸雲門に入こそ、心もとなき導師のちからなりけらし。

四 須磨のあまの矢先に鳴か郭公

五 ほとゝぎす消行方や嶋一つ

六 須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ

明石夜泊

七 蛸壺やはかなき夢を夏の月

ハ かゝる所の種なりけりとかや。此浦の実は秋をむねとするなるべし。……………

……………(中略)……………

浦にとゞまり、素波の音にさへ愁おほく侍るぞや。……………千歳のかなしび此

のごとく、発句一・七・文章(イ)・(イ)によって構成されている。この構成に従って読み進めていくと、我々は先ず、発句の並べ方に幾つかの疑問点があることに気付かされる。すでに、先学によって指摘されている所であるが、冒頭の

二句、一・二が、「等類・同想」(宮本氏「『笈の小文』への疑問」上)であること、また、文章(イ)・(ロ)・(イ)を、一個

の連続した文章として読んだ場合(宮本氏は、一篇の独自の紀行的俳文とされる。前掲論文下)、須磨訪問記としてそれな

りのまとまった構成を持っているにもかゝらず、文章と

かかわりのない、ややかけ離れた内容の句、六「須磨寺」

七「明石夜泊 蛸壺」が、(ロ)・(イ)の文章の流れを、むしろ

混乱させる形で挿入されていることである。冒頭一・二の

句について、宮本氏は、「ほとんど同意で説明的な二句を並べて投げだしたままの形で書き始められたとすれば、いかに「未定稿」だとしても、前にも言及したように、芭蕉自身の手に成った行文としてはあまりに拙劣に過ぎはしないか」とされ、それは、「奈良・大阪の発句から、須磨の

条へ移る区切りを示すため、編集者によって配列挿入されたのではなからうかとの臆測も生じてくる云々」(前掲論文下)と、氏の刊本『笈の小文』他者編集説の一つの論拠とされている。結論的には、私も氏の意見に同意するが、一・二句の推敲過程を考えることは、実は文章自体の成立過程の推測にもかかわる重要な問題だったのである。以下、発句一・二、文章(イ)、発句三についてまず検討を加えてみることにする。

一・二の句と同想の、しかもやや長文の詞書を持つ芭蕉真蹟懷紙が現存する。それは、

不耐秋

(イ') a' 卯月の中比須磨の浦一見す。

c' うしろの山は青ばにうるハしく

b' a'' 月はいまだおぼろにて、はるの

名残もあはれながら、たゞ此浦

のまことは秋をむねとするにや。

心にもものゝたらぬけしきあれば、

夏はあれど留主のやう也須磨の月

はせを

芭蕉 (除印)
青桃 (陽印)

のごときものである。^{註1}問題は、この真跡懷紙の執筆時期であるが、この真蹟懷紙の場合、使用されている関防印・印章・署名等^{註2}から、およそ奥の細道の旅以後、元禄二年冬から同三年中の間と推定される。ということになれば、刊本『笈の小文』の発句一・二との前後関係はどうなるのであろうか。

まず二「月見ても物たらはずや須磨の夏」であるが、旅行後まもなく書かれたかと思われる真蹟写に全く同じ形で掲載されている。この真蹟写は、笈の小文旅中の伊賀・吉野・須磨・明石の句十二句を順序不同につらね、小築庵春湖蔵として『芭蕉翁真蹟拾遺』（大蟲自筆知橋写本、赤羽学氏「芭蕉翁真蹟拾遺翻刻と解説」『俳文芸』十三号昭和五四年六月、参照。）に収められている。この句は、その冒頭に詞書も何もなく「月を見ても物たらはずや須磨の夏」として出る。この句形が、恐らく須磨訪問時に近い頃の初案であつただろうと考える。というのは、二の形（「月を見ても」真蹟写・『泊船集』ともにこの形。ただし『泊船集』には「すま」と詞書がある。『芭蕉庵小文庫』には、「すま」と詞書があり「月を見て物たらはずや」と「も」を脱す。刊本『笈の小文』二「月見ても」は、おそらく不注意により「を」を落してしまったか）、

月を見ても物たらはずや須磨の夏、
の中七「物たらはずや」が、真蹟懷紙では、詞書の中に「心にも、の、たらぬけしきあれば」と書き込まれ、その結

果「留主のやう也」と改り、「月」と「夏」が入れ替えられたことになる。しかし、詞書冒頭に「卯月の中比須磨の浦一見す」と書かれている通り、句のもともとの発想が「須磨の夏」を詠むことにあったことから考えてみると、「夏はあれど留主のやう也須磨の月」の句形は、中心が月へ移ってしまうと同時に、「あれど留主のやう」というくどい感じの須磨の夏の説明が、一句を散漫なものとしてしまっているわけで、芭蕉は、そうした点に気付き、本来の発想「須磨の夏」を座五にすへ、月と入れ替えることで、一句を一「月はあれど留守のやう也須磨の夏」に治定したと考えられる。

以上の推測が正しいとすれば、刊本『笈の小文』須磨・明石の条の冒頭に、「須磨」の詞書のもとに並べられた二句は、まことに間の抜けた感じだといわねばなるまい。成案と捨てられた筈の初案が並記されていることになるからである。芭蕉が、刊本『笈の小文』において、まとまりのある須磨・明石紀行をものしようとした場合に、こうした形が、たとえ未定稿だったとしても出てくる筈はないであろう。我々はやはり、宮本氏が述べられたごとく、芭蕉ではない、乙州の編集説を考えざるをえないのである。芭蕉没後の芭蕉真蹟は、乙州にとって、芭蕉が初案として捨てたものであれ何であれ、清書して出版する価値のあるものになっていたであろうことが十分に推測されるからである。

さて、一・二の句を、以上のように考えたとしても、我々には芭蕉の紀行作品の冒頭として、

須磨

一月はあれど留主のやう也須磨の夏

(イ) 卯月中比の空も朧に残りて、……………

という形が、素直に納得できるかというところではない。

他の芭蕉の紀行作品、ないしは刊本『笈の小文』中の別の旅立ちの文章との比較においてそのことは明瞭である。たとえば、刊本『笈の小文』の江戸旅立ちの条、

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名よばれん初しぐれ

また、吉野へ出発する時の文章、

弥生半過る程、そゞろにうき立心の花の、我を道引枝

折となりて、よしのゝ花におもひ立んとするに云々

さらには、有名な『おくのほそ道』の文章、

弥生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は在明にて光をさまれる物から云々

といった各条と、刊本『笈の小文』の文章冒頭、

イ 卯月中比の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月

もいとゞ艶なるに、山は云々

とが酷似していることをまず考えねばならないのである。

ところで、私の刊本『笈の小文』に対する見方は、宮本

説とも微妙に違って、訪問の場所、旅のコースに従って創作された小紀行作品が、その場合々々の完結性をもって（創作された時期については、それぞれの場合が考えられねばならない）刊本中に数篇存在し、それらを乙州が、後年や自分勝手に、笈の小文の旅にかかわる他の芭蕉真蹟類とともに編集してしまったのではないかとする見方である（一章註1拙稿参照）。こうした見方にたてば、刊本『笈の小文』の須磨・明石の条も、もともとの芭蕉の発想は、この部分のみで独立した小紀行作品だったのではないかという推測が可能であり、芭蕉が発想した形は、現在の刊本『笈の小文』とは、相当に異ったものだったと考えられてくる。こうした私の考え方に有力な手掛りを与えてくれるのが、元禄十一年刊『泊船集』夏部の一連の記事である。同書夏部冒頭に、芭蕉の句「須磨の蟹の矢さきに啼や郭公」があつて、この句の後に註記の形で、

此詞書ハ須磨紀行に見え侍る。是ハ須磨の蟹の鳶鳥を追とて矢を放ちけるに、源平のむかしもおもはれて吟じたまふなりけり。

と書かれている「須磨紀行」がそれである。つまり我々は、元禄十一年以前に風国が実見した筈の「須磨紀行」と呼ぶにふさわしい形の作品が存在したであろうことを考えてよいことになるわけである。

だとすれば、刊本『笈の小文』須磨の文章イが、いわゆ

る芭蕉紀行作品における旅立ちの文章の形をとっていることは、改めて注目されねばなるまい。刊本の冒頭発句一・二についてはすでに論じたが、結論を先にいえば、文章イは、発句二↓一の推敲過程の中から出てきたものだったように思われる。

まず、文章イより検討してみる。

イ a 卯月中比の空も、朧に残りて、

b はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、

c 山はわか葉にくらみかゝりて、

d ほとゝぎす鳴出べきしのゝめも、

e 海のかたよりしらみそめたるに、

イの a と b は、「空も」「月も」でもって対句をなしているが、a は、このままではやや表現不足であって、空の何如なる現象が朧に残ったのか、いま一つ正確な意味が伝わってこないうらみが残る。ところが、真蹟懷紙の文章イを、a'・a''・a''' の順、「卯月中比（の空も）」、いまだおぼろにて、はるの名残もあはれながら」と続けてみれば、文意はよく通る。つまり、イにおいて、本来月についての叙述であった文章 a''・a''' を、対句仕立てにするため、「空」の叙述に用いたがための文章表現の不足だったわけである。

文章 b は、したがって、「月」のみがイの b' 「月」にかさなるのみで、あとはすべて新たに文章が創作されたこと

になる。

文章 c は、c' とはぼかさなるが、「青ば」を「わか葉」にかえ、「くろみかゝ」ということで、a の「卯月中比」をうけ、さらに c 「わか葉」↓ d 「ほとゝぎす」の連想において文章は綴られたと考えられる。即ち文章イは、a・b 「空」「月」から、c・d 「わか葉」「ほとゝぎす」へ、さらに e 「海」へと視点を移す配慮のもとに構成されていた。そしてその視点は、イの終りの文章、

f 上野とおぼしき所は、麦の穂浪あからみあひて、

g 漁人の軒ちかき芥子の花のたえぐに見渡さる

において、b 「上野の麦」（上野については、第一章 16 参照）g 「漁人の軒の芥子」へと、さらに焦点はしばらくはいくのである。イを、作者芭蕉の視点の動きに焦点を置いた用意周到の文章だったと見た場合、イは、まさにイの素材として奉仕させられたというべきではあるまいか。註 2 に述べたように、真蹟イが、ことに姿勢を正し慇懃な態度で執筆されたものであったこと、また、刊本の文章ハと、真蹟イにおけるハとの関連を考えあわせてみれば、イあるいはハからイが草されたとは考えにくい。文章は、イからイ・ハへと展開されたと考えざるをえないのである。イの後に三「海士の顔先見らるゝやけしの花」が置かれているが、文章の視点の移動にそって読みすすめてきた読者は、この三の「けしの花」に自然に到達するのである。計算された

見事な構成といつてよいであろう。

ところで、この須磨の早朝を叙した文章イと発句三による一段が、二十一日の朝の体験に基づくものであり、実際の芭蕉達の足どりとは逆行しているという指摘がなかったわけではない（阿部正美氏『芭蕉伝記考説』）。しかし、事実としての旅の時点より、一年以上二年近くを経た頃に、一編のまとまりのある「須磨紀行」を創作しようとした芭蕉の意識を考慮してみれば、逆行という事実のみの指摘は、あまり意味を持たないであろう。それよりも、いまみた、文章イにおける見事な視点の移動による構成に注目すれば、作者芭蕉の位置が、須磨の海上にあったのではないかということの方が重要ではあるまいか。須磨の海を船で渡った時の体験（第一章⑩須磨↓兵庫参照）が、芭蕉にあって、その印象によって構成された一段だったと私は考える。勿論それは、須磨を去る時のものだったわけであるが、その体験を逆の形で、須磨訪問の冒頭に持ってきた芭蕉の意識には、何よりも緊密に構成された紀行小品を創作しようとする姿勢が顕著だったというべきであろう。

次に、発句三の持つ問題に触れてみる。

この句が、旅行当時に創作されたであろうことはほぼ間違いない。『芭蕉翁真蹟拾遺』に「海士の旧跡」の詞書があつて、三と同形で伝えられ、また『猿蓑』けし四句の内に、「翁に供せられてすまあかしにわたりて 似合しきけ

しの一重や須磨の里」という杜国の句も伝わるからである。^{註3}ただ注意すべきことは、旅行当時の発想、「海士の旧跡」として作られた時の意味と、紀行の中に組み込まれた時の意味とが、相当に違ってきているのではないかということである。

『芭蕉翁真蹟拾遺』の詞書が、仮に事実であつたとすれば、「海士の旧跡」は、第一章⑧⑨で述べたごとく、行平配所の松、月見の松、むらさめ堂のあたりを、「松風・村雨の旧跡」とも云ったわけで、おそらくここでの作だつたであろう。とすれば、三の「あまの顔」は、実際に出会つた海士だつたのではなく、行平との契りで古来文学に登場する、いわば古典的イメージとして定着している、松風・村雨二人の海士の顔だつたというべきであろう。従って一句の意味は、「海士の旧跡」に立ってみると、あの松風・村雨二人の海士の顔が思いうかべられるのであるが、先ず眼にとまつたのは罌粟の花であつた。しかし、罌粟とも呼ばれるその花を見ていると、花はいつしか二人の海士の顔に見えてくるのであつた。」ということになるのではないか。

こうした旅中の発句、つまり松風・村雨の旧跡において読まれた句が、文章イに呼応する発句として、紀行中に据えられた場合、句の内容が変えられてしまったことはいふまでもない。文章イを受ける発句三の「海士の顔」は、勿

論、芭蕉当時の須磨の現実の「海士の顔」となっているわけ、句意は通説のごとく、早朝須磨の浜辺で先ず見た海士の顔と、そこに咲いていた罌粟の花とのとりあわせの句だった筈である。生活者としての「海士の顔」に「罌粟の花」のとりあわせは、須磨浦の現実生活の匂いそのものだったといえよう。文章イフ「海人の軒ちかき芥子の花」は、たとえば『滑稽雑談』に「極テ繁茂ス」とあるように、^{註4} どうやらそれは海人の家の垣根だったと考えられる。益軒の『花譜』には、「沙がちにてやはらかなる土地」に適し、「魚のあらひ汁を折々そぐ」のがよいと説かれて^{註5} いる。また『滑稽雑談』は「微ニ腥氣アリ」ともいう。つまり、海士（漁人）の持つ生活臭と、罌粟の花の腥氣（青くさき）とが、歌枕・名所としての須磨の浦をではなく、現実生活感覚としての須磨の浦を描写することに、文章イ・発句三の一段における芭蕉の表現の目的はあったのだと考える。

（未完）

註1 大阪清海泰堂氏蔵、『芭蕉図録』（昭和十八年靖文社刊）所載）。

2 岡田利兵衛氏『芭蕉の筆蹟』（昭和四十三年春秋社刊）によれば、関防印は、難読、不耐秋13号、これは「おくのほそ道」より使用され、元禄三年末で終るものである。印章は、芭蕉1号桃青12号の二類が捺される場合、その作は全て姿勢を正し、愚歎端正の筆意のもので、第一級用。貞享五年二月揮

豪の「なにの木」懷紙が初出で、その後「おくのほそ道」にも携行されたもの。署名は、仮名落款、「「はせを」がハラダンではなく、晩年のさらりとした雄大・大胆形への移行期の形であることがわかる。

3 この杜国の句について森田蘭氏は、『猿蓑発句鑑賞』（昭和五十四年永田書房刊）で、「『猿蓑』所収以外に現存資料で杜国の句がないのだから、作ったか否かすらわからないのである。そこで私なりの結論をいえば、頭書の（この）句は杜国の作にあらずして、芭蕉の代作である可能性が極めて濃い」と代作説を出しておられる。

4 元禄五年刊嵐蘭撰『罌粟合』に、「けし垣の内や硯の小町形 万里 けしの籬の形容写しえたり云々」といった句と批評が見られる。

5 同右『罌粟合』に「青くさき句もゆかしけしの花 嵐蘭」の句がある。